

## イザイホーの桶廻りのティルル

### はじめに

イザイホー 沖縄県久高島で一二年に一度、午歳の十一月一五日から一八日までイザイホーが執り行われていた。久高島の概況、祭祀組織については畠山篤(二〇〇一a)に、イザイホーの次第(儀礼)、神歌(二一種類)のうたわれる場、祭りの趣旨については畠山(二〇〇一b)に述べたので、参照されたい。

本論のねらい 本論では、イザイホーでうたわれる神歌群(二一種類)のうちX桶廻りのティルル①(外間殿)とXI桶廻りのティルル②(久高殿)を取り上げ、次第(儀礼)を考慮しながらその主題と構造を考察し、イザイホーの祭祀世界を浮き彫りにする。

### 一 桶廻りのティルル①(外間殿)

X桶廻りのティルル①(外間殿) 四日目のX桶廻りのティルル①(外間殿)とXI桶廻りのティルル②(久高殿)は、桶廻りの神遊びでうたわれるという点で対になっている。

まず、X桶廻りのティルル①(外間殿)を検討する。

## 畠山 篤

X桶廻りのティルル①(外間殿)の本文と共通語訳は、比嘉(一九九三a、四〇一―四〇三頁)の「タマグウシクミスル」を引用する。A・Bなどの段落区分と節を示す数字は、筆者が付した。

そして、仲宗根・湧上ノートの「外間殿ぐきまいぬティルル」、ならびに安泉ノートの「外間殿でのオモロ」と比較する。

### 思 構

A 一 タマグウシク

玉城王の

二 タマヌミヨイ

玉のミヨイ

三 チュティルグウワール

一人娘の

四 ンダルグワ

ウミダルよ

仲宗根・湧上ノートの採録した本文と共通語訳は、次のとおりである。

○ んー へーい へーい へーい へーい

以下各節の初めにつく

たまぐしく うね

玉城 ウネ

たまぬみよーい

玉のみよーい

○ ちゅていりわる んだるぐわー

ちゅていりなさる 御樽小

二のミヨイが未詳だが、湧上(二〇〇〇、七五・七七頁)は、ミヨイ(ミヨイとも)を「みかう(御顔)の転訛音か。(中略)側室

の意とも」とし、タマヌミヨイを「玉のかんばせの側室よ」と解釈している。また、三のチュティルグウール（チュティリワールとも）を「一粒種、独り子の意か」とし、三・四を「一粒種の 思樽小」と解釈している。伝承によると、Aは玉城王が一粒種のように思樽小（小は指小辞）を寵愛したことを述べているという。

Aは思樽のことをこれしか述べていないので、この段落の意図するところが必ずしも明らかでない。

『遺老説傳』の伝え、しかし、思樽については島に詳しい伝承があり、右のAはこの伝承を下地にしている。その伝承は今でも島で語られているが、その最古の資料が沖縄各地の古老の語りを記した『遺老説傳』（一七四五年）である。その本文は嘉手納宗徳（一九七八、一二九〇～三三頁）にあるが、長いのでその梗概を次に記す。

玉城の百名に白樽があり、免武登能按司の女を妻とした。夫婦は東海に久高島を発見し、乱世を嫌って小舟でこの島に渡った。貝を拾って暮らしていたが、東海岸の伊敷泊で食物豊饒と子孫繁栄を祈願すると白壺が寄ってきた。屋久留川で身を清めてこれを手にし、穀物の種子もの（麦、粟、豆）を得た。これを蒔いて食物にしたが、とくに二月に熟した麦を王府に献上して王の喜ぶところとなり、王はこれで神酒を作って各地の御嶽で祭らせ、人民に賜った。久高島でも穀物がよく実り、子孫も繁栄した。

白樽は一男二女を生み、長女・於戸兼はノロになり、男子・真仁牛は父の家統を継いで外間根人の祖になり、次女・思樽は巫女になった。

思樽はやがて玉城の巫女になり、玉城主の寵愛をうけて懷妊する。しかし、放屁が原因で島に戻り、思金松金を生む（その時の産室が今も外間根人の家にある）。思金松金は七歳にして王子であることを知り、入朝しようと伊敷泊で祈ったところ、黄金の瓜子が寄り着いた。

そこで、これを献上品として持参し入朝する。その時の口上はこの黄金の瓜子は瓜の豊作をもたらすというものだった。これを機に父子は名乗りをあげ、時節を待って彼はやがて国王（西威王）になった。この時から国王は二年に一度久高島に行幸し、外間根人とノロは毎年一度、玉城に魚類を献上することになったという。

黄金の瓜子 黄金の瓜子の伝承は夙に柳田國男（一九三〇）によって七話蒐集され、この『遺老説傳』の黄金の瓜子の伝承は歴史伝説として合理的解釈がなされている、と指摘されている。岩瀬博（一九九〇、二八〇六頁）は、この黄金の瓜子の昔話をさらに広く四三話蒐集し、そのモチーフと伝播を考察している。この論によると、本話は日本独特の昔話として成立し、「流され王」モチーフを地盤として海洋民に支持され、伝播している。その伝播には北前船を中心とする近世海上交通が大きくかわっており、伝播の中心時期は一七世紀後半以後であり、沖縄には一八世紀前半にはすでに伝播されていたという。

沖縄は昔話も真实性を帯びた語りになる傾向が強く、柳田が指摘するように昔話としての黄金の瓜子が久高島では歴史伝承になっているのみならず、祭祀の由来伝承にもなっている。

国母になった神女 一般的で類型的な伝承が歴史伝承化するにあたっては、その島なりの論理がなければならない。穀物の種子ものがニライカナイから寄ってきたと伝える『遺老説傳』の前半部は、琉球一円に流布する穀物起源説話に通じているが、類型と違うのは麦を国王に献上し、国王が国の各御嶽で麦穂祭をさせたと説くことである。

『遺老説傳』の後半部でも、この方式が反復されている。黄金の瓜子の語りの元は全国に分布する昔話だったが、この語りは既にあった久高島の穀物起源伝承と結合し、ニライカナイからの寄り物・黄金の瓜子を梃子にして王権に改めて急接近し、島の神女を母とした王子が国王にまで上りつめ、これが国王一行が久高参詣をして麦穂祭をする由

来になったと説く。

なお、王府の正史は西威王が久高島の神女の子であると記していない。

**外間系統の語り** この伝承は外間家の語りを基にしている。国母になった思樽の父は外間根人であり、外間根人とノロ（外間ノロだろう）が王城に参上している。この伝承は、外間家と王権との結び付きを力説しているのである。

外間根人の娘・思樽は国王に寵愛され、国母にまでなった果報めたい神女として崇められ、現在も外間殿の脇に西威王の産屋を保存し、王府との強い絆を強調している。だから、この神女の名が外間殿の祭場で島の神女たちの誇り・理想像として、まずAで真っ先に顕揚・称賛されたと考えられる。

**破格の構造** Aは、XI桶廻りのティルル②（久高殿）のAとともに、祭日の祝福からはじまる一類の様式を破り、祭日の祝福の前に位置づけられている。この破格の構造は、島の神女・王府の神の島の神女になる成座式を終えようとする今、歓喜のあまり、国母になった島出自の神女・思樽を縁の深い外間殿で称賛しながら、ナンチュたちの将来を祝福したということではなからうか。

**王妃になれない神女** なお、思樽と対照的に、国王に寵愛されながらも国母にはもとより王妃にもなれないまま、悲劇的な死を遂げた神女がいる。その神女は国<sup>ツナヤ</sup>等<sup>ツナヤ</sup>で、一・二日目のイザイホーの元ティルルに根神<sup>ニギハヤヒ</sup>のシジ（守護霊）の代表として登場している（後述）。この神歌はこの神女の名前を上げるだけだが、島には彼女をめぐる悲劇的な伝承がある。その伝承は、比嘉・谷川（一九七九、一四三頁）によると、次のとおりである。

第一尚氏の最後の国王・尚徳王が、久高島の国笠<sup>ツナヤ</sup>ノロと恋に落ちているうちに王城で革命が起き、国王は海に投身して亡くなった。こ

れにともない、大里系統（久高家・タルガナー家との繋がり深い）の国等は王妃になれないどころかノロの地位から根神<sup>ニギハヤヒ</sup>に落とされ、代わりに外間家の女性がノロに昇格したという。

ここには、大里系統・久高（タルガナー）系統と外間系統との間に、王朝の交替に連動した主導権の交替が認められる。

湧上（二〇〇〇、八六頁）は、この伝承とイザイホーの始まりについて次のような伝承を聞き取っている。国笠はノロから根神に落とされて失意のうちに縊死したが、その国笠の没落から教訓を導き出し、島の女に同じ轍を踏まさないようにとイザイホーを始めたという。

以上、国母になった外間系統の神女を賛嘆する一方で、陰では王権の衰亡とともに没落した大里系統・久高系統の神女から教訓を導き出すようとしている。ここからも、イザイホーと首里王権が緊密につながっているとわかる。

#### 祭日の祝福

B五 ムムトゥマール

久しく

六 テイントゥマール

めぐって来る

七 イザイホーヨ

イザイホーよ

八 ナンチュホーヨ

ナンチュホーよ

Bは、簡略化されているが、祭日を祝福している。

#### 七つ橋渡りの神遊び

C九 イティティグルー

五ツグルー

一〇 ウトウガニヤ

五ツ橋

一一 イティティバシ

七ツ橋を

一二 ナナティバシラ

足音もなく

一三 アシトウンシャン

足音もなく

一四 ピシャトウンシャン

軽がると

一五 ムルトウヌギ

軽がると

一六ムルグルイ

とぶようにして越え

Cは、久高側のナンチュを先導する五ツグルー・ウトウガニが七つ橋渡りの神遊びをする、と述べている。

桶廻りの神遊び

D 一七ヌルガネータラ

ノロたちは

一八ヤジクマエーヤ

ヤジクたちは

一九アカツビー

ンチャティオージを

二〇ヒキタティティ

かざし持ち

二一ナンチュホーヤ

ナンチュたちは

二二アウシュバーヤ

青クバの扇を

二三ワチャイフリ

脇に振り

二四シュリニフリ

袖に振り

二五ナキタヌ

七重の

二六ハウムガキ

着物をつけ

二七ミスタリイティ

袖をたれて

二八ウガマリラ

拝みましよう

二九ハミラリラ

たてまつりましよう

Dは、この儀礼の中核になる桶廻りの神遊びを述べている。しかし、その語句の解釈がむずかしい。そこで、他の神歌と比較してみる。

仲宗根・湧上ノートはDを次のように採録し、解釈している。

〇 ぬるがねーら うね

祝女金達 ウネ

やじくまえーや

やじく前は

〇 あかちゅびや うね

赤チュビを ウネ

びきたていてい

引き立てて

〇 なんちゅほーや うね

ナンチュホーを ウネ

あおしゅばーや

アオシュバーを

〇 わちにふり うね

脇に込めて ウネ

とうりにふり

袖に込めて

〇 ななきたぬ うね

七桁の ウネ

ふぁーうむがき

ふぁーうむがき

〇 みしゅたりてい うね

御衣垂れて ウネ

〇 とうりたりてい

袖垂れて

〇 うがまりら うね

拝みましよう ウネ

はみりら

戴きましよう

Dと仲宗根・湧上ノートの本文は、一節(うね とうりたりてい)を除いてほぼ対応している。

安泉ノートは、Dを次のように採録している。

〇 外間子ーが

〇 はいるまみゃー

〇 やじくまえーや

〇 あかすばー

〇 びきさていてい

〇 ナンチュホーヤ

〇 おーすばー

〇 わちにふり

〇 すでいにふり

安泉ノートは、前二者に較べて簡略である。しかし、神女たちの神遊びの前に祭場を示す「外間子ーがはいるまみゃー」があつて、注目される。

桶廻りの神遊びの段落の復原 このように、新旧のDの段落を比較すると、Dの本来の姿が見えてくる。それは、およそ次のようなa・bの二段構成だったと考えられる。共通語訳は筆者が付した。

a (1) 外間子<sup>ツカマシ</sup>が

外間根人の

(2) ハイルマミャー

神の真庭で

- b (3) ヌルガネータラ ノロ金たちは  
(4) ヤジクマエーヤ ヤジク前は  
(5) アカツ(チュとも) ビーヤ(アカスパーとも) 赤帯(ナンチュ)を  
(6) ヒ(ピとも) キタ(サとも) テイテイ 引き立てて  
(7) ナンチュホーヤ ナンチュホー(ナンチュ)を  
(8) アウシュバーヤ(オースバーとも) 青帯(ナンチュ)を  
(9) ワチャイフリ(ワチニフリとも) 脇に振り  
(10) シュリ(スディとも、トゥリとも) ニフリ 袖に振り  
(11) ナナキタヌ 七桁に  
(12) ハ(ファーとも) ウムガキ ハウム掛けに  
(13) ミス(シュとも) タリテイ 御衣を垂れて  
(14) トウリタリテイ 袖を垂れて  
(15) ウガマリラ 拝みましよう  
(16) ハミラリラ 戴きましよう

a は祭場の提示、b は桶廻りの神遊びを述べている。

**祭場の提示** まず、a の祭場の提示について検討する。(1)(2)「外間子<sup>フカマシ</sup>ガハイルマミヤー」はいささか訛っているが、「外間子<sup>フカマシ</sup>(外間根人)が神が真庭」のことで、外間根人が管理する外間殿の真庭の意である。ここでは、桶廻りの神遊びをするにあたってその祭場を提示している。

**絵描き扇・神扇** 次に、b の桶廻りの神遊びについて検討する。(5)のアカツ(チュ) ビー(アカスパーとも) は、比嘉(一九九三a)ではンチャティオージと解し、高橋(一九七九a、二〇四頁)も赤い扇と解し、いずれも絵描き扇<sup>エガシキアウギ</sup>ととらえている。

絵描き扇とは、表に日輪と鳳凰、裏に月と牡丹を描いた神扇で、元来、島では二人のノロしか持てないものだった。比嘉実(一九九一、四九・五〇頁)によると、右の神扇の表の「日輪双鳳雲文」は中国の

影響を受けた首里王府が国王万歳と国家安寧の思想を文様化したもので、王府の支配的なイデオロギーを象徴する祭具として地方のノロに下賜したものだという。この絵描き扇・神扇は、権威ある国家的な神権のシンボルだったのである。

ところが、現行はもとより、鳥越(一九六五、二二八二頁)によると、一九四七年にもすでにノロをはじめとしたヤジクたちが、絵描き扇・神扇を持って神遊びをしていた。

一体どのような事情によって、このノロしか持てない絵描き扇・神扇を一般神女のヤジクも所持するようになったのだろうか。このことについて、筆者は次のような伝えを故久高ノロ(安泉ナヘ刀自)から聞き取っている。王府が瓦解して後のこと、両ノロが神事を華やかにしたいという思いから他の高級神女たちにも絵描き扇・神扇を持たせたが、それでは一人前の一般神女たち(ヤジクからタムトウまでのタマガエー)が持てないことになってかわいそうだということになり、一般神女たちにも絵描き扇・神扇を持たせたという。

このようにノロが一般神女たちにまで広く絵描き扇・神扇を持たせたという篤い思いやりは、王府という国家的な後ろ盾をなくして祭祀の執行に危機感を抱いたノロが、時代の変化に対応して祭祀の継続を図ろうとして取った妥協策ではなかったろうか。島の論理を優先させたこの時点で、絵描き扇・神扇に与えられていた国家的な神権の権威は半ば失墜したとみるべきである。

こうして見ると、近代に入ってから変容した儀礼のあり方に合わせて神歌も変え、(3)ヌルガネータラ(ノロ金たちは)に(4)ヤジクマエーヤ(ヤジク前は)を加えて、ノロとヤジクがアカツ(チュ) ビー(アカスパーとも)、すなわち絵描き扇・神扇を持っていると述べたことになる。この解釈でいくと、ノロとヤジクが絵描き扇・神扇を持って神遊びをする四節(3)~(6)と、ナンチュが青蒲葵<sup>アヲ</sup>の扇を持って神遊

びをする四節(7)～(10)が対になっており、いよいよ説得力を持つことになる。

**赤帯・青帯はナンチュの言い換え** しかし、ツ(チュ)ビー(スパーとも)は本当に扇の義だろうか。また、儀礼上の妥協的な若干の変容に即応して、祭りの核心部である神歌までが容易に変わるものだろうか。

この点、(5)アカツ(チュ)ビー(アカスパーとも)を「赤帯」と解した大城学(一九九三、八三頁)に注目したい。ツ(チュ)ビ(スパーとも)が帯の義であることは、Ⅷ綱のティルルの三に外間根人の着る神衣裳のシルチュチュビ(白帯)からもわかる。このようにアカツ(チュ)ビー(アカスパーとも)が赤帯の義だとすると、(8)アウシュバー(オースパーとも)が青帯の義だとわかる。ただし、ここの赤・青は美しいとか、色鮮やかなくらの義だと考えられる。

では、この美しい帯を身につけているのは誰だろうか。それは、当然のことながらイザイホーの主役・ナンチュである。それで、この赤帯・青帯が、ナンチュの言い換えになっていると考えられる。

**ノロとヤジクがナンチュを愛護する** 以上をもとにして(3)～(10)の本文の構造を示すと、次のとおりになる。ノロとヤジクが(主語)、ナンチュを(目的語)、神衣裳の袖を脇に振りながら愛護・守護する(述語)。すなわち、(3)(4)は主語を示し、(5)が目的語で、(6)が述語である。そして、(5)の言い換えが(7)(8)であり、(6)の言い換えが(9)(10)なのである。**神衣裳を垂らした拝み**『沖縄古語大辞典』(一九九五、四八八・五七四頁)は、(11)ナナキタと(12)ハ(ファー)ウムガキの語義が未詳だという。しかし、bが神衣裳に焦点をあてて桶廻りの神遊びを述べているので、仲宗根・湧上ノートの共通語訳にあるようにナナキタは七桁、すなわち七つの衣桁であり、この対語のハ(ファー)ウムガキはナナキタと同義のハ(ファー)ウム掛けかと類推される。ハ(ファー)ウ

ムは依然として語義未詳だが、衣裳にかかわる語だと考えられる。

また、(13)ミス(シュ)は御衣の義、(14)トゥリは袖の義である。(13)(14)は、神女たちが神々に祈願を届けるために御衣・袖を美しく垂らして神遊びをする、と述べている。

(13)～(16)は祈願する時の類句で、「アラシヘーのティルル」の最後の節で、神女たちが一心に祈願する神遊びの様子を次のように述べている。カンジャナナシーについては、畠山(一九八一)がある。

- ヤラリキヤーイ フルマイ 歩みを合わせて 群れ舞う
  - アユリキヤーイ フルマイ 歩みを合わせて 群れ舞う
  - スリサリティ ウギヤマビラ 袖を垂らして 拝みましよう
  - ミスサリティ ウギヤマビラ 御衣を垂らして 拝みましよう
- (ハミラリラとも) (戴きましよう)

右の四節は、神々を敬って足並みを揃えて舞い、神衣裳を垂らして拝む、と述べている。

こうして見ると、(11)～(16)の意味は、神女たちがたくさんの衣桁に衣を掛けたように神衣裳の御衣・袖を美しく垂らしながら神遊びをして神を拝もう、ということだとわかる。

**神衣裳** 以上、bは桶廻りの神遊びを神衣裳(帯・衣・袖)に基づいて述べている。

**イーチョーハリーチョーの神遊び** このようにa・bを解釈する根拠が、もう一つある。それは、八月一日に蒲葵御嶽で執り行われるイーチョーハリーチョーの神遊びが、今問題にしている儀礼と神歌に類似しており、同じ発想をしているからである。イーチョーハリーチョーについては、畠山(一九八二)がある。

イーチョーハリーチョーでは、乳幼児と一般神女の神役を退いた女性(七〇歳以上)を除く島の全女性が、蒲葵御嶽に参集し、幸せを祈願する。その神遊びの様子は、次のとおりである。参列者は幾重にも

円陣を組む。円陣の中心に女性の国神六名（音頭）<sup>ウツドム</sup>がおり、ティルルを先唱する。その周りには晴れ着をつけた女の子や娘、若妻、その周りには晴れ着の紺地（神衣裳の白衣裳ではない）をつけた一般神女のナンチュ、ヤジク、ウンサク、タムトゥが、次々と円陣を組む。すなわち、女性の国神を除いて、円陣の外にいくほど高齢者になっている。一般神女たちは女の子や娘・若妻たちを優しく見守って傍にいて、傍神とも呼ばれている。神遊びの所作は、扇を右手に持ち、ゆっくりと時計廻りをする。

ティルルは、この神遊びを次のように述べている。

- a ○ イビリカサ      イビ司（イビ名）で
  - タキリカサ      嶽司（イビ名）で
  - b ○ ヌルガネターラ      ノロ金たちが
  - ヌシガネターラ      主金たちが
  - ヤジクフィーチ      ヤジクを引き連れ
  - ナンチュフィーチ      ナンチュを引き連れ
  - ティースフォガターヤ      子や孫たちを
  - ワチャニフリ      脇に振り
  - トウリニフリ      袖に振り
- この本文の構造は、次のとおりである。まず、a 神遊びをするにあたって祭場を提示している。イビリカサもタキリカサも、蒲葵御嶽のイビである。次いで、b ノロがヤジクとナンチュを引き連れ、そのノロ・ヤジク・ナンチュが（主語）、脇にいる子や孫たちを（目的語）、紺地の袖を脇に振りながら愛護・守護する（述語）。
- そして、右の一節ごとに次のような囃子詞が入る。
- ユーエユエー      寄って寄って      晴れ着
  - ハリーチョー      晴れ着

この囃子詞は、女たちがみんな御嶽に寄って、晴れ着を揃えて神遊

びをしている、と賛美している。これを逐語的に見ると、イーチョーは絹（布・衣の義）、ハリーチョーはハレイチョー、すなわち晴れ着の義だと考えられる。このように衣裳をきれいに揃えた神遊びは、みんなの心を一つにした祈りの姿である。

こうして見ると、イーチョーハリーチョーの神遊びが桶廻りの儀礼と神歌に類似しており、同じ発想をしているとわかる。とくにいずれの神歌の構造も、a 祭場を提示し、b 誰かが（主語）、誰かを（目的語）、衣裳の袖を脇に振りながら愛護する（述語）と述べ、揃って神遊びをする神女たちの衣裳を賛美している。

以上から、復原した桶廻りの神遊びの段落の a が祭場を提示し、b が神衣裳（帯・衣・袖）に基づいてノロとヤジクがナンチュを愛護すると述べている、と確認できるだろう。

**イザイホーの元ティルルの神遊びの欠落**      なお、一類の神歌のうち、この神歌にだけイザイホーの元ティルルの神遊びを述べる段落がない。その事情は、この神歌と対になるXI 桶廻りのティルル②（久高殿）とVI 朱付け遊びのティルルがともにこの段落を欠落する傾向を持っているので、その欠落する傾向の延長線上にX 桶廻りのティルル①（外間殿）のイザイホーの元ティルルの神遊びの段落があると推定される（後述）。すなわち、この神歌は本来イザイホーの元ティルルの神遊びを述べる段落を持っていたが、欠落したと考えられるのである。

このイザイホーの元ティルルの神遊びの段落が本来この神歌のどこに位置していたか不明だが、仮に i 段の最後に置き、この段落を E とする。

以上、七つ橋渡りの神遊び（C）、イザイホーの元ティルルの神遊び（E）は、この外間殿での桶廻りの神遊びの前提になっている。

i 段      以上、王から寵愛された神女・思樽のことを述べる A、祭日を祝福する B、神遊びを述べる C・D・E が、i 神遊びを主題にする段

落である。

ただし、安泉ノートの神遊びの配列はD・Cであり、この儀礼の中核になる桶廻りの神遊びを先にしている。

諸々の祈願

F三〇

五〇

Fは、II夕(暁) 神遊びのティルル②のFとほぼ同じなので、引用を省略する。Fは、諸々の祈願を述べている。

ii段 以上のFは、ii諸々の祈願を主題にする段落である。

奉仕の誓い

G五二

六三

Gは、II夕(暁) 神遊びのティルル②のGとほぼ同じなので、引用を省略する。Gは、奉仕の誓いを述べている。

iii段 以上のGは、iii奉仕の誓いを主題にする段落である。

X桶廻りのティルル①(外間殿)の構造 以上、X桶廻りのティルル

①(外間殿)の構造をまとめると、次の一覧表になる。

区段落分	主 題	現行 比嘉	仲宗根・湧上ノート	安泉 ノート	構 成
A	思 樽	○	○	○	i
B	祭日の祝福	○	○	○	
C	七つ橋渡りの神遊び	○	○	○	
D	桶廻りの神遊び	○	○	○	
E	イザイホーの元ティルルの神遊び(想定)	×	×	×	
F	諸々の祈願	○	○	○	ii
G	奉仕の誓い	○	○	○	iii

## 二 桶廻りのティルル②(久高殿)

XI桶廻りのティルル②(久高殿) 次に、XI桶廻りのティルル②(久高殿)を検討する。

この神歌の本文と共通語訳は、比嘉(一九九三a、三九七〜四〇〇頁)を引用する。A・Bなどの段落区分と節を示す数字は、筆者が付した。

そして、仲宗根・湧上ノートの「久高殿ぐきまーいぬティルル」、ならびに安泉ノートの「久高殿でのオモロ」と比較する。

太陽神と月神

Aー アガリトトウウブヌシ 太陽の御神様

二 チチュヤトトウウブヌシ 月の御神様

仲宗根・湧上ノートは、次の本文を採録し、共通語訳を付している。

○ うり あがりとーとう ウリ 東尊

○ うぶぬしめー 大主前

○ うり ちちゅやとーとう ウリ 月は尊

○ うぶぬしめー 大主前

安泉ノートは、次の本文を採録している。

○ うり あがりとーと 大主ぬめー

○ ちつやとーと 大主ぬめー

引用した比嘉(一九九三a、三九七〜四〇〇頁)は、囃子詞のウリを記していないが、他の神歌は各節の冒頭にウリを記している。

Aは太陽神と月神を賛美しているようだが、X桶廻りのティルル①(外間殿)のAの思樽と同様、これだけではこの段落の意図するところが必ずしも明らかでない。

男女による双分的世界観 しかし、ある程度裏付けのある推測ができ



る。島には男女による双分的世界観が強くあり、高級神女は次のように言っている。男は太陽神に守護されて東に座を占め、女は月神に守護され、南に座を占める。また、太陽の昇る明け方に交わると男の子が授かり、月の昇る夜に交わると女の子が授かる。

東に対して西が女の座になりそうだが、島の西に後生(墓地)があるのでこれを忌み、ノロと根神の守護霊が鎮座するスベー嶽のある南を女の座にしている。

**太陽神と月神の神話** また、この男女による双分的世界観を示す好例として、島には次のような太陽神と月神の神話がある。

太陽神(男神)と月神(女神) ははじめ仲のいい夫婦で、いつも共に照っていた。しかし、月神が太陽神より照っていたので、太陽神が嫉妬して月神の顔に泥を投げつけた。それで、月神は怒り太陽神と共にいられないといって太陽神のいない夜に歩くようになり、太陽神より照らなくなった。これ以来、太陽が日中に照り、月が夜に照るようになった。それでも、一神は時には仲のよかった昔を懐かしく思い、時々出会って抱擁する。その時他人に見られないように暗くする。これが日食と月食である。

**名付けとイザイホー** この男女における双分的世界観が年中行事として形象化された典型が、名付けとイザイホーだと考えられる。

男性だけが執り行う年中行事に、八月一〇日に執り行われるティラーガミ(太陽神)がある。この祭りは、島の男の守護霊であるティラーガミ(太陽神)を祭るものである。この行事のなかで名付けという男性年齢階梯社会への加入儀礼が、イザイホーと同じく一二年に一度、午歳に執り行われていた。そして、この名付けと対になる一般神女組織への加入儀礼・イザイホーが、太陽の力の最も衰える冬至前後の十一月の満月の日(一五日)から執り行われている。そして、比嘉(二九〇b、一三六頁)の聞き取りによると、男たちの名付けをしな

いと女たちのイザイホーができないといわれている。

以上、この男女による双分的世界観を図化すると、次のようになる。

○ 男―太陽神―東―昼―名付け

○ 女―月神―南―夜―イザイホー

以上から、Aの「アガリトトウブヌシ」(東尊大主)は男性原理に基づき名付けを象徴しており、「チチュヤトトウブヌシ」(月尊大主)は女性原理に基づきイザイホーを象徴している考えられる。

なお、湧上(二〇〇〇、一五一頁)によると、生業などを根拠にして男女による双分的世界観に次のような事項を追加している。

○ 男―海―魚―米―天

○ 女―畑―粟麦―芋―地

**破格の構造** Aは、前のX桶廻りのティルル①(外間殿)のAとともに、祭日の祝福からはじまる一類の様式を破り、祭日の祝福の前に位置づけられている。この破格の構造も、名付けと対になるイザイホーを終えようとする今、歓喜のあまりそれぞれの象徴になる太陽神と月神を賛美し、二大神事の完成・達成を高らかに歌い上げたと考えられる。

## 祭日の祝福

B三 ムムトウマール

久さしく

四 テイントウマール

めぐって来る

五 イザイホー

イザイホー

六 ナンチュホー

ナンチュホー

Bは祭日を祝福している。Bは、X桶廻りのティルル①(外間殿)のBと同じである。

仲宗根・湧上ノートは、次の本文を採録し、共通語訳を付している。

○ うり むむとうまーる ウリ 百年までも  
ていんとうまーる 千年までも

## 桶廻りの神遊び

○ うり いぢゃいほーよ ウリ イヂャイホーよ  
 なんちゅほーよ ナンチュホーよ  
 安泉ノートの本文も、仲宗根・湧上ノートとはほぼ同じである。

C七 クダカシーガ

久高根人が

八 ハイテイメール

拝んでいる

九 ハンアシャギ

神アシャギ

一〇 ハンガマミヤ

神の真庭

一一 マチヌシウヤサメーガ

月の御神様が

一二 タボーチメール

管掌している

一三 タルマミキ

タルマ酒

一四 ビザイダチ

左に抱き

一五 ニギリダチ

右に抱き

Cは、この儀礼の中核になる桶廻りの神遊びを述べている。

仲宗根・湧上ノートは、次の本文を採録し、共通語訳を付している。

○ うり くらかてーが

ウリ 久高子が

はんあさぎ

神あさぎ(神を祀る家)

はんがまみゃー

神の真庭

○ うり まちぬしゅら

ウリ マチヌシウラ

うやしやめーが

親達前が

○ うり たぼーちめーる

ウリ 賜わりなさる

たるまみき

樽真神酒

○ うり ぴちやいらち

ウリ 左に抱いて

にぎりらち

右に抱いて

安泉ノートは、次の本文を採録している。

○ たるがなが

○ はんがあさぎ

○ はんがまみゃー

○ まちぬすら

○ うやさめーが

○ さぼーちめーる

○ さるまみき

○ 左だち

○ 右だち

このCは、X桶廻りのティルル①(外間殿)のDと同じく二段構成をとり、前半は祭場の提示、後半は桶廻りの神遊びを述べている。

前半の七〜一〇は、桶廻りの神遊びをする祭場を提示している。「久高子」は久高根家・タルガナー家の当主・久高根人で、結局「久高子」も安泉ノートの「たるがな」も同じことである。

後半の一〜一五は、月神(女神)が賜わった神酒を入れた樽を祭場に据えて、その周りを廻る、と述べている。

## イザイホーの元ティルルの神遊び

D一六 サシプターラ

ノロたちは

一七 ヤジクピイチ

ヤジクを連れ

一八 ナンチュピイチ

ナンチュを連れ

仲宗根・湧上ノートと安泉ノートは、右の本文を採録していない。

ただし、大城(一九九三、八〇・八一頁)は次の本文を採録し、共通語訳を付している。

○ ウリ ぬるがにたら

ノロ金たち

○ ウリ やじくぴーてい

ヤジクを連れて

○ ウリ なんちゅびーてい

ナンチュを連れて

○ ウリ いじゃいほーぬ

イザイホーの

○ ウリ むとうているる

本ティルルを

○ ウリ なやがらち

鳴りあがらせて

こうして見ると、Dは中絶しているが、イザイホーの元ティルルの神遊びの前半を述べているとわかる。

以上、このイザイホーの元ティルルの神遊びを述べる段落は、中絶していたり、採録されていなかったりしている。この神歌と対になるX桶廻りのティルル①（外間殿）においてはこの段落が欠落していたが、XI桶廻りのティルル②（久高殿）とVI朱付け遊びのティルルにおいてもこの段落が欠落する傾向にあった。こうして見ると、X桶廻りのティルル①（外間殿）がイザイホーの元ティルルの神遊びを述べないのは、この欠落する傾向の延長線上にあるとわかる。

### 七つ橋渡りの神遊び

E一九イティイグルー

五ツグルー

二〇ウトウガニヤ

二一マダマソーティ

真玉をして

二二ティイダマソーティ

手玉をして

二三イティイバシラ

五ツ橋を

二四ナナティバシラ

七ツ橋を

二五アシトウンシヤン

足音もなく

二六ビイシャトウンシヤン

足音もなく

二七ムルトウヌギ

軽がると

二八ムルグルイ

とぶようにして越え

Eは、久高側のナンチュを先導する五ツグルー・ウトウガニが七つ橋渡りの神遊びをする、と述べている。

以上、イザイホーの元ティルルの神遊び(D)、七つ橋渡りの神遊び(E)は、この久高殿での桶廻りの神遊びの前提になっている。

i段 以上、太陽神と月神を賛美するA、祭日を祝福するB、神遊びを述べるC、Eが、i神遊びを主題にする段落である。

以上の神遊びの配列は、この儀礼の中核になる桶廻りの神遊びを先

にしており、以下の配列は祭りの時間的展開の順になっている。諸々の祈願

F二九

）

三四

Fは途中で絶えている。

しかし、仲宗根・湧上ノートと安泉ノートは、全文を採録している。その本文と共通語訳はII夕（暁）神遊びのティルル②のFとほぼ同じなので、省略する。Fは、諸々の祈願を述べている。

ii段 以上のFは、ii諸々の祈願を主題にする段落である。

### 奉仕の誓い

比嘉（一九九三a）は奉仕の誓いを採録していないが、仲宗根・湧上ノートと安泉ノートは全文を採録している。その本文と共通語訳はII夕（暁）神遊びのティルル②のGとほぼ同じなので、省略する。Gは、奉仕の誓いを述べている。

G〇

）

〇

iii段 以上のGは、iii奉仕の誓いを主題にする段落である。

XI桶廻りのティルル②（久高殿）の構造 以上、XI桶廻りのティルル②（久高殿）の構造をまとめると、次の一覧表になる。

三段構成 以上の六種類の神歌群（一類）は、i神遊び、ii諸々の祈願、iii奉仕の誓いの三段構成をとっている。

儀礼の特徴を述べるi段 このうちii段とiii段の詞章は固定しているが、i段はii段・iii段と比較すると変化に富んでいる。

まず、祭日の祝福が冒頭に位置する傾向を持ち、それには三つの形式があり、次の三グループに分類できる。ただし、(3)は二段目に位置

段落 区分	主 題	現行 (比嘉)	仲宗根・ 湧上ノート	安泉 ノート	構 成
A	太陽神と月神	○	○	○	i
B	祭日の祝福	○	○	○	
C	桶廻りの神遊び	○	○	○	
D	イザイホーの元ティルルの神遊び	中絶	×	×	
E	七つ橋渡りの神遊び	○	○	○	
F	諸々の祈願	中絶	○	○	ii
G	奉仕の誓い	×	○	○	iii

している。

(1) II夕(暁) 神遊びのティルル

(2) IV髪垂れ遊びのティルル・V泉神遊びのティルル・VI朱付け遊びのティルル

(3) X桶廻りのティルル(外間殿)・XI桶廻りのティルル(久高殿)

この祭日の祝福における三形式は、一類の神歌をうたう場の日付と性格に対応している。すなわち、(1)の形式は一・二日目の聖域に入る夕(暁) 神遊び(七つ橋渡り)で用いられ、(3)の形式は四日目の桶廻りの神遊びで用いられ、(2)の形式はその他の二・三日目の儀礼で用いられている。

また、神遊びのうちその儀礼の中核になる神遊びが先になる傾向を持っている。

そして、各神歌はイザイホーの元ティルルの神遊びを踏まえており、夕(暁) 神遊びにおける七つ橋渡りの神遊びやその他の儀礼(禊・嶽廻り)をも前提にしていることを強調している。とくにイザイホーの元ティルルの神遊びと七つ橋渡りの神遊びが一類の神歌すべてにある(あった)のは、俗なる世界から聖なる世界に入る時の緊張感を反映しており、またイザイホーの元ティルルの重要性をも反映している。

よう。

このように、i段は各儀礼の特徴をよく述べている。

〈テキスト〉

筆者が考察の対象にしたイザイホーの神歌のテキストは、次のとおりである。

○高橋六二 一九七九 a 「神遊び」『神の島の祭り イザイホー』雄山閣

○宜保栄治郎 一九七九 「イザイホーの神歌」『イザイホー調査報告書』久高島イザイホー民俗文化財特定調査 沖縄県教育委員会

○比嘉康雄 一九九〇 b 「神々の古層⑤主婦が神になる刻」ニライ社

○比嘉康雄 一九九二 a 「神々の原郷久高島 上巻」第一書房

○大城学 一九九三 「イザイホーの儀礼と歌謡」『沖縄久高島のイザイホー』砂子屋書房

○仲宗根政善・湧上元雄 一九六八 「仲宗根政善・湧上元雄ノート」(外間守善・玉城政美 一九八〇 a 「南島歌謡大成I 沖縄篇上」角川書店に再録) 〓 仲宗根・湧上ノートと略称する

○安泉松雄 一九九一 「安泉松雄ノート「イザイホーの御祭り」」『久高島の祭りと伝承』桜楓社 〓 安泉ノートと略称する

○外間守善 一九六三 「外間守善ノート」(外間守善・玉城政美 一九八〇 a 「南島歌謡大成I 沖縄篇上」角川書店に再録) 〓 外間ノートと略称する

○鳥越憲三郎 一九六五 「琉球宗教史の研究」角川書店(外間守善・玉城政美 一九八〇 a 「南島歌謡大成I 沖縄篇上」角川書店に再録)

○城政美 一九八〇 a 「南島歌謡大成I 沖縄篇上」角川書店に再録)

○岩瀬博 一九九〇 「昔話の伝承と伝播―「黄金の瓜種」をめぐる―」『伝承文芸の研究』(三弥井書店) 所収

○嘉手納宗徳 一九七八 「球陽外巻 遺老説傳」(角川書店)

○島山篤 一九八一 「カンジャナシ」『沖縄県久高島の祭り』(白帝社)

○島山篤 一九八二 「八月ヨーカーの秘儀―イーチョーハリイチョーの神歌―」『沖縄国際大学文学部紀要』(11巻1・2合併号)

○島山篤 二〇〇一 a 「久高島イザイホーへの誘い」『葉集研究』(一七

号) (萬葉研究会)

島山篤 二〇〇一b 「イザイホーの次第」 『奄美沖縄民間文学』 (創刊号) (奄美沖縄民間文学学会)

比嘉実 一九九一 「文様による古琉球の思想」 『古琉球の思想』 (沖縄タイムス社)

比嘉康雄・谷川健一 一九七九 『神々の島』 (平凡社)

外間守善 一九九五 『沖縄古語大辞典』 (角川書店)

柳田國男 一九三〇 「瓜子織姫」 『柳田國男全集 第八卷』 (筑摩書房)

湧上元雄 二〇〇〇 『沖縄民俗文化論―祭祀・信仰・御嶽』 (榕樹書林)